

いのちの輝き

増田 一世

「俺の入院していた精神科病院には老人の病棟があって、亡くなると線香の匂いが漂ってきた。その匂いを嗅ぎながら自分もこうして最期を迎えるのかと思っていた」

「病院の庭には桜の木があって、毎年、毎年桜が咲いて、そして散っていく、何回この桜を見るんだろうと思っていた」

やどかりの里のメンバー、須藤守男さんの話だ。退院したいという須藤さんの願いはかなわず精神科病棟の中で13年間が経過していた。

須藤さんは1990年にやどかりの里が社会復帰施設を開設したことを契機に退院してきた。18年がたつ。グループホームに暮らし、後から退院してきた仲間たちの兄貴分のような存在だ。各地で体験を語る講師の仕事にも従事している。

須藤さんは病棟に漂ってきた線香の匂いに自分の将来を重ねて見ていた。「このときは本当に辛かった」と述懐する。須藤さんが入院中のこの苦しい思いを語り始めたのは、つい最近のことだ。退院後の仲間との暮らしややどかりの里でのさまざまな活動について生き生きと語ってきた須藤さんだが、辛いこと、苦しいことは語らずにきた。

今年になって、ぼつぼつと苦しかったことを語り始めた須藤さんがいる。病院時代の辛い気持ちを語り始め、そして病気の苦しさを表現するようになった。

「精神病は辛いんです。落ち着かない気分ってわかりますか？歯が痛い時にイライラしたり、いてもたってもいられないような気持ちに

なるでしょ。それに近いと思います」

自分を見つめながら、言葉を探しながら、須藤さんは語る。

やどかりの里の講師登録者学習会（やどかり出版に所属し、各地での講演活動を行う人たちが運営する学習会。希望者はだれでも出席できる）で須藤さんが子ども時代のこと、入院中の辛かったこと、病状の苦しさを語り始めて、仲間たちは須藤さんの中に何か変化があったことを感じた。須藤さんは、

「自信ができたのかな……やどかりの里の仲間や職員に受け止められたりすることで…」

須藤さんの内面に起こった変化に学習会の仲間たちは感動を覚えた。須藤さんは、退院後豊かになった人間関係や自分の力を生かせる仕事や活動を手に入れ、自分の病気の辛さや13年間にわたる入院生活のことを過去のこととして整理していったのだろう。客観的に見つめ直すことで、須藤さんの気持ちにゆとりが生まれ、自分の力を自分で信じられるようになったのではないだろうか。須藤さんの内発的な力が蓄えられてきたのだろう。

退院後18年間の年月の中で、統合失調症からの回復、さらに人間として成長していった須藤さんの姿に静かな感動を覚えるのである。統合失調症を発症することで、これまでの人生をリセットしなくてはならなかった須藤さんだが、60歳を越えて再び自分の人生を取り戻している。須藤さんの生きざまにいのちの輝きを感じる昨今である。